コリント人への手紙第一　第15章　31節

「兄弟たち。私にとって、毎日が死の連続です。これは、私たちの主キリスト・イエスにあってあなたがたを誇る私の誇りにかけて、誓って言えることです。」

今も続く侵略戦争に直面している人の言葉があった。世界に向けての言葉である。惨禍が数ヶ月も続くなかで世界への言葉である。「戦争に慣れないでください。」日常的にながされる画面で目もこころも麻痺してしまうおそれはある。日毎に報じられる死者の数、負傷者の数、避難民の数がひとりひとりの悲惨を希薄化し、数に目を向けさせてしまう慣れがある。数値も事実だが、起こってはならない戦争への憤りを忘れてはならないし、戦禍に喘ぐひとりを見失ってはいけない。

麻痺してしまうこころ、慣れてしまう目、流されてしまう日常がある。それにブレーキがかけられる唯一の手立てかも知れない。毎日が死の連続であることだ。何に死を告げるのか。何を捨て去るのか。状況に慣れて、物事に鈍感になり、無関心なこころに死である。

自分の慣れに死を告げるのはどなたか。それは私たちの主イエス・キリストである。このお方に在って、私たちは死に、まったく新しく生かされることが出来る。自分に死、主に生かされる目、耳、こころが必要だ。それで日ごと新たに生きる。

2022年6月10日